

主 題：私の信条⑤

聖書箇所：随所

私たちはこのすばらしい信仰告白と言える使徒信条を学んできょうが5回目ということになります。私たちが一体何を信じているのかを見事に要約したのがこの使徒信条であると言えると思います。皆さんもこの学びをして、私たちが信じている父なる神はどんなお方なのか、子なる神はどんなお方なのかと、聖霊なる神はどのようなお方なのかということのを少しは理解していただけたのではないかと思います。

#### D. 「聖なる公同の教会」：「我は聖なる公同の教会を信ず」

きょう私たちは「聖なる公同の教会」ということについてご一緒に見ていきます。

その前に、この使徒信条を意味を考えながらご一緒にお読みしましょう。

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、

ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、

死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、

天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。

我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、

からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

「我は……聖なる公同の教会……を信ず。」とあります。まず、この信条が教える教会について、その後で主イエスご自身がお話になる教会について見ていきます。これがあなたや私が信じる教会についての神様の真理です。

#### 1. 「教会」：この信条が教える教会

まず「教会」ということばについて、ぜひ次のことを覚えておいてください。「教会」ということばは「～から外へ」や「～から外へ出る」ということばと「呼ぶ」という意味のことば、二つのギリシャ語からなります。ですから「教会」ということばは神の目的のために神によって罪の中から呼び出された者たちと言うことができます。罪の中を歩んでいた私たちに対して神が働いてくださって、あなたを呼び出してくださった。こうしてあなたは救いにあずかったのです。でも私たちがこの救いを覚える時に、神様は何となくあなたを呼び出したのではない。あなたが何か抽選に当たったみたいな、そんな話ではない。神はあなたを名指して呼んでくださった。あなたを選んでくださり、あなたを召してくださったのです。ですから「教会」と言った時に、あなたは罪の深みから神によって呼ばれ、その深みからあなたは引き出していただいたということです。当然そこには神様ご自身のご計画があるということです。ですから「教会」というこのことばは人を指しているということです。建物ではありません。神様は建物を呼び出したわけではありません。人を呼び出してくださったのです。だから信仰者の皆さん、神様は目的を持ってあなたを罪の中からご自身のもとへと呼んでくださった、つまり救われたのです。しかも神は目的を持ってあなたを救ってくださった。それがこの「教会」ということばが私たちに教えることです。

#### 1) 「公同の教会」の意味 Iコリント12：37、コロサイ1：24

この使徒信条を見ていただくと、ただ「教会」と書かずに「公同の教会」と書かれています。この「公同の教会」というのはどういうことかということ、救われたすべての者たちだけが属している目に見えない唯一の教会のことです。世界にひとつしか存在していない。そしてそこに集っているすべての人たち——あえてこういう言い方をしますけれども——は救われている者たちだけです。という、この目に見えない教会が存在する以上、目に見える教会も存在します。これは今お話ししたのとは違います。目に見える教会というのはクリスチャンだけが、救われた者たちだけが集っているかということ、そうでない者たちも集っているのです。ですからこの「公同の教会」というのは目に見えない、世界にひとつだけ存在している救われた者たちだけが属する教会、群れであるということです。この「公同の教会」のことをキリストのからだとも呼んでいます。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとり各器官なのです。」と、パウロがIコリント12：27で教えています。またコロサイ1：24では「キリストのからだとは、教会のことです。」とパウロは言います。

では、どのようにしてこの「公同の教会」に、キリストのからだに属するようになるのかということ、

聖霊のバプテスマによってこの「**公同の教会**」のメンバーになるのです。キリストのからだの一員となるのです。聖霊のバプテスマとあえてお話ししたのは、これは水のバプテスマではないからです。水のバプテスマを受けることによって、「**公同の教会**」の一員になること、キリストのからだの一員となることはできません。どんなよい行いによっても私たちは決して、決して救いにあずかることはない。ですから水のバプテスマを受けることによって私たちは「**公同の教会**」の一員となれるかというとなれません。キリストのからだの一部となることができると言うとなれません。でも聖霊のバプテスマを受けることによって私たちはこの一員となるのです。

では聖霊のバプテスマとは一体何かというと、既に我々が学んできたように聖霊なる神様があなたの内に内住してくださると。聖霊なる神様があなたをご自身にとって住まいとしてくださること、そしてあなたのうちに聖霊なる神様がおられるのであれば、あなたは「**公同の教会**」のメンバーであると、キリストのからだの一部であると言うことができるのです。パウロはIコリント12：13に「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」「一つの御霊によってバプテスマを受け」、聖霊のバプテスマのことです。イエス・キリストを信じた人は人種も関係ない、国籍も関係ない。すべてこの「**公同の教会**」に属する者たちとなったのです。つまり救いをいただいたということです。

## 2) 「**聖なる教会**」の意味 レビ21：6、Iペテロ1：16、Iテサロニケ4：3

もう一度この使徒信条を見ていただくと、「**公同の教会**」のところにあえて「**聖なる**」ということばがついています。ただ「**公同の教会**」を信ずるのではない。それは「**聖なる公同の教会**」だと。まずこのことばが意味していることは、この「**公同の教会**」に属している者たち、つまり救いにあずかっているひとりひとりに対して神はあなたが聖くあることを求めておられるということです。これはもう当たり前前の話です。なぜならあなたを呼び出してくださった神は、すべてにおいて聖いお方です。ですから当然その方はあなたに対しても聖さを求めておられます。旧約聖書においても新約聖書においても同じことをみことばは私たちに教えてくれます。レビ21：6に「**彼らは自分の神に対して聖でなければならない。また自分の神の御名を汚してはならない。**」とあります。皆さんもよくご存じのように新約聖書Iペテロ1：16にも「**わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。**」と。神がすべてにおいて聖いお方であるゆえに、その方によって救われたあなたにも神は同じことを求めておられます。

神様の恵みによって救われた私たちは目的を持って生かされています。なぜならこの教会というのがそういう意味だと言いましたでしょうか？神は目的を持ってあなたを呼び出してくださったと。では神はあなたに対してどんな目的を持っているかということ、あなたを救ってくださった神様をあなたが世にあかしするためにです。もちろん私たちはことばをもってするのですが、同時に我々の生き方をもって、歩みをもって私たちの神を明らかにしていくのです。ですから内住する聖霊が日々あなたや私をイエス様に似た者に変えていこうとしている。イエス様に似た者に変えていかれることによって、あなたはイエス様を世に明らかに明示するのです。人々の前でイエス様がどんなお方なのかを示していく、その目的を持ってあなたも私も救われたのです。では私たちがこの主が聖いお方であるということを示すために罪の中を歩み続けていたら、どうやってそれを示すことができます？聖い神を示すためには当然我々は神の助けをいただきながら聖く歩み続けていくことが必要なのは言うまでもありません。私たちが罪から離れ、神が喜ばれるように聖く歩んでいこうとするならば、神様は私たちを通してご自身を明らかに示してくださる。この世にはこういう神がおられるのだということを世に明らかにする存在としてあなたや私を神様は使ってくださいなのです。

パウロはIテサロニケ4：3で「**神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。**」と言います。しかし、どんなに強く罪から離れようと願っても、罪との闘いが常につきまとうし、罪に対する敗北を繰り返しています。神を喜ばせたいという思いを持って生きるのですが、現実はそうでない生き方をしていることも私たちはわかっているのです。ですから私たちは常に神の前に自分の罪を告白しながら歩んでいく。それがまさに我々救いにあずかった者たちの生き方です。「**聖なる公同の教会**」と言った時に、救われた者たちが個人としても、群れとしても聖さを求めて歩んでいく、その大切さをまず我々は見ることが出来ます。

この「**聖なる**」ということばについてはまた別の意味があります。イギリスの新約聖書学者であったクランフィールドという先生がこんなことを言っています。「**聖とは教会の忠誠に関することばである。つまり教会は自分自身の財産なのではないのだ**」と。つまり教会はだれかある人物の私物ではなく、神の所有物です。ですから私たちはその方の前に正しく歩んでいくこと、その方に対して忠実に歩んでいくことの大切さを忘れてはならないということです。

我は「**聖なる公同の教会**」を信じると言った時に、私はこのイエス・キリストの恵みによって救いに

あずかり、「**公同の教会**」の一員とされた。そしてその一員とされた私に神が求めておられることは、日々の生活において聖く歩み続けることであり、同時に主に対して忠実に歩み続けていくことである。それを目的として神は私を救ってくださったのだということです。信仰者の皆さん、私たちは決してその目的を忘れてはならないのです。神様はあなたや私を罪から救ってくださって、じゃあ好きに生きなさいと言っておられるのではないということです。神の栄光を現す者として造られた私たちが神の栄光を全く無視して、汚す者として生きてきた。でも一方的なあわれみによって私たちは救われて、本来の目的に沿って生きる者へと生まれ変わったのです。それはこのすばらしい神の栄光を現す者として生きていくという、新しい、そして本来の歩みが始まったということです。使徒信条に書かれているそのことばが意味しているのはそういうことです。

## 2. 「教会」：主イエスの教える教会

二つ目に見ていくのは、主イエス・キリストご自身が教えてくださる「**教会**」です。

### 1) 教会の所有者：「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」

マタイ 16：18 をお開きください。ここでイエス様は「ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」と言われました。まだこの当時教会は存在していませんでした。ですから未来のこととしてイエス様はお話しになったのです。見ていただきたいのは、わたしはこの岩の上に教会を建てますと言わずに「**わたしの教会を建て**」と言われたのです。この「**建てます**」という動詞は未来形です。これから後の話としてイエス様はお話しになったのです。見ていただきたいのは、ここで「**わたしの教会**」とイエス様が言われた以上、建てられた教会は主ご自身の所有物だということです。ですから「**キリストは教会のかしら**」であると、エペソ 5：23 も教えるし、コロサイ 1：18 でも「**御子はそのからだである教会のかしら**」だと書いてあります。つまりみことばが教えるのは「**かしら**」なるお方、服従すべきお方、教会の所有者は神であって、この方に従う責任を持っているのが我々だということです。この「**かしら**」である主に私たちは服従していく、このお方のお考えや命令に従っていくのは当然のことです。つまり、その方が私たちに与えてくださったこの聖書のことばに従うことです。

ですから、次のように言うことができますと思います。「**教会**というのは主イエス・キリストのためにすべてのことをする集まりである」、「主イエス・キリストの栄光を現すことをだけを願いながら聖書の教えに従う集まりである」と。今、イエス様のおことばを見て私たちが改めて教えられたことは、**教会**というのは社交場ではないのです。集まってこの世的なことをするために教会が存在しているのではない。教会というのは神の所有物なのです。個人的にも神のみこころに従って神に忠実に生きていくように、群れとしても私たちが目指すべきことは、このお方の教えてくださること、このお方のみこころに従い、何とかしてこの方の栄光を現そうとすることです。信仰者であるあなたがこの群れにあって、しっかりと覚えなければいけないのは、あなたや私の責任はこの方のみことば、聖書の教えに従っていくということです。だから皆さん、教会はもう一度聖書の権威を取り戻さなければいけない。権威は人間にあるのではないのです。権威は神様のことばにあるのです。私たちが手にしているこの聖書だけが神が私たちに下さったものであり、ここには神がどんなお方であるかが記されているし、この中には神があなたや私に何を求めておられるのか、何を望んでおられるのか、何を命じておられるのか、主のみこころが記されているのです。これは神からのものであり、これが私たちにとっての宝なのです。ここに権威があるのです。

たとえそれがどんな感銘を私たちに与えてくれたとしても、私たちは人間のいろいろな教えに従おうとするのではない。私たちの責任は神が教えてくださっていることに従っていく、これが個人として、また群れとしての責任です。キリスト教の歴史を振り返ると、信仰の勇者たちが何をしてきたのか——。聖書の権威のために戦うわけです。世の中がどんなことを言おうと、どんなことが世の中でポピュラーになろうと、神様の言われていることは何かをしっかりと見極めてそれに従っていくのです。人々はオールドファッションだと言うかもしれない。古過ぎる、時代遅れだと言うかもしれない。でも私たちは神に従う者として神によって選び出されたのです。この方に従うのが我々信仰者の歩みなのです。そしてそれが教会の使命なのです。

### 2) 教会の建て方：「わたしはこの岩の上に」

ではこの教会をどんなふう建てていくのか——。そのことについてもイエス様はこのみことばの中でお話しになっています。18節「**わたしはこの岩の上にわたしの教会を建て**」るとあります。「**この岩の上に**」、建物の土台の話です。一体どんな土台の上にこれを建てていくのか——。これを私たちが正確に知るためには、この「**岩**」とは一体何を意味しているのかを理解することが必要です。ローマカトリック教会はこの「**岩**」はペテロであると解釈します。というのはこの箇所は、イエス様がこの約束をペテロに与えたかのように見ることができるからです。ですから彼らは主イエス・キリストはペテロという

人物の上に教会を建てることを約束したのだとして、ペテロは最初の教皇だと考えるのです。そして今存在している教皇、ずっと継承されていくのですが、これはペテロの継承者たちだと考えるのです。なぜかという教皇はキリストから特別な権威を受け、この地上でキリストを代表する人物だから彼らが語ることは神が話しになったことと同じような権威を持っていると考えるのです。そんなことあり得ます？人間が語ることは神が話しになったことと同じような権威を持っている。とんでもない！しかし彼らはこのような解釈をするのです。

### ◎ 岩＝ペテロが間違っている理由

なぜ彼らの解釈が間違っているのか、二つ理由を言います。

#### ① 単語の意味の矛盾

新改訳聖書のマタイ 16 : 18 の「ペテロ」というところと「岩」というところにマークがついていて下の欄外を見ると、最初の「ペテロ」はギリシャ語では「ペトロス」で、二つ目の「岩」は「ペトラ」であると説明しています。イエス様はここで「あなたはペテロ（つまりペトロス）です。わたしはこの岩（ペトラ）の上にわたしの教会を建てます。」と言われたのです。最初に出てきた「ペテロ」、つまりペトロスという名詞は男性名詞です。意味は「小さな石ころ」です。次に出てきた「岩」というのはペトラというギリシャ語で、この名詞は女性名詞です。意味は「岩盤」や「非常に大きな岩」ということです。そのことからしてもこの「岩」というのがペテロを指していないのだということがわかります。

#### ② 聖書の教えとの矛盾

また同時にこの解釈は聖書の教えと矛盾しています。というのはペテロは教会の土台とか礎石になることはできないのです。教会の礎石はイエス様だからです。Iコリント 3 : 11にも「だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」とあります。教会の礎石、イエス様の上に建て上げていくということです。ですからこの土台がイエス様以外のものであるということはありません。イエス様の上にペテロが「岩」として、彼の継承者が教会を建て上げていくと、そういうことを主がお話しになったのではないのです。

#### \* 「この岩の上」とは？

ここでイエス様がお話になった「この岩の上」には二つの解釈があります。

##### (1) 「ペテロの告白」

一つはペテロの告白だという解釈です。マタイ 16 : 13 でイエス様がガリラヤ湖よりはるか北のピリポ・カイザリヤ地方に行った時、弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか。」と尋ねました。そして 15 節では今度は彼らに対してイエス様は「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と問うています。この質問は弟子たちがわたしのことをどんなふうと考えているかではなくて、わたしをだれだとあなたたちは信じているのかと問われたのです。その質問に対して 16 節でシモン・ペテロが答えるのですが、そのペテロの告白というのは大変すばらしいものであって、福音の根幹を要約したものです。我々信仰者が一体何を信じているのか、イエス様とは一体だれなのかを見事に表したものでした。なぜそう言えるか——。16 節「あなたは、生ける神の御子キリストです。(You are the Christ, the Son of the living God.)」、ここに三つの名詞と一つの動詞が出てきています。でもそれぞれに冠詞がついているのはどうしてかという、これは別の人の話ではないということを明らかにするためです。同じ人物についての話なのです。同一性を教えようとしてあえてそのような書き方をします。

### ◎ 主イエスは：

このペテロの告白がイエス様とはこういう方なのだということを教えています。

#### ① 「救世主である」：

まず最初に「キリスト」と出てきます。ペテロは「イエス様、あなたはキリストです」と言います。つまり救世主ということです。みことばによって約束されていた約束の救世主、キリストだとペテロは告白します。しかも唯一の救世主だと告げました。たくさんの救い主が世の中に存在するわけではない、ひとりしかいないのです。人類が待望していた、神が約束してくださった罪から我々を救ってくださる唯一の救い主キリストだと、それが一つ目にペテロが告白をしたことでした。

#### ② 「人となられた神である」：マタイ 1 : 23、ヨハネ 1 : 14、Iヨハネ 4 : 2

二つ目に「御子」とあります。つまりイエスは人となられた神なのだ告白しています。「御子」と言った時にイエス様の人間性を強調するのです。私たちはよくクリスマスの時にこのみことばに触れまされども、「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」、この「インマヌエル」というのは「神は私たちとともにおられる」という意味です。マタイ 1 : 23 のみことばです。つまりこのみことばが言っているのは、神が私たち人間とともにいてくださる。遍在という教理の話をしているのではないのです。私たちのひとりとなって私たちの間に住んでくださるということです。全知全能の創造主なる神が我々と同じようになって、この世に人として住んでくださると。ヨ

ハネ1：14では「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」、神であるお方が私たちの間に人としてお住まいになったと。Iヨハネ4：2も「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。」、イエス様こそが人としてこの世にお見えになった神であり救世主だと。そのことを告白するのは、神によって告白するのだと。ですからこのペテロの二つ目の告白を見る時に、ペテロが言いたかったことは、イエス様、あなたは人となられた神なのだ、「御子」なのだということです。

### ③「まことの神である」：Iヨハネ5：20

三つ目に「神」と書いてあります。イエス様に対してあなたこそがまことの神であると告白するのです。ヨハネはIヨハネ5：20でこう言っています。「しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。」、つまりイエス様が来て、真実な方——神を「知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています」と。イエス様が地上にお見えになったことによって、我々は神様とはどういう方であるかを知ることになったのでしょうか？被造物を見ることによって、そこにすばらしい神がいることを我々は漠然と知っていました。でもイエス様が来てくださって、イエス様の歩みを見ることによって、教えを聞くことによって、神とはどのような方であるかをより深く知ることになったのです。だからヨハネは「神の御子が来て」、つまりイエス様が来て「真実な方」、神を「知る理解力を私たちに与えてくださったことを知って」と。そしてその後「それで私たちは、真実な方のうち（つまり神のうち）に、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。」と続きます。ヨハネは「それで私たちは、真実な方（神）のうちに、すなわち」と言うのです。「御子イエス・キリストのうちにいる」、つまりイエス様と父なる神様とを全く同等に見ています。そしてこう続くのです。「この方こそ（イエス様こそ）、まことの神、永遠のいのちです。」と。イエス様の弟子のひとりであったヨハネは、イエス様とともに生活をしてこの強い確信を持つのです。私たちが寝食をともにしているこのイエス様は、すべてをお造りになった神なのだ。ですから彼はこうしてIヨハネ5：20でこの方こそ、イエス様こそがまことの神なのだと告白したのです。まさにペテロが告白したそのとおりです。あなたは神なのです、そのようにペテロは告白するのです。

### ④「生ける神」：ヨハネ10：28

もう一つあります。それは「生ける」という動詞です。つまりイエス様は「生ける神」なのだとは彼は告白するのです。この「生ける」という動詞は現在形を使っています。生き続けておられるお方です。死ぬことがないのです。永遠から永遠に存在しておられるのです。あえてこういう表現を使うことによって、いのちのない偶像とイエス様とを比較するのです。偶像は人間が作ったものですからいのちがありません。でもイエス様は違う。我々人間にいのちを与えてくださった。神がお造りになった被造物にいのちをお与えになった方ゆえにいのちを持っておられるお方なのです。

このみことばを思い出してください。イエス様が「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」、ヨハネ10：28です。イエス様が「わたしは」と言われたのです。「彼らに」、イエスを信じる者たちに「永遠のいのちを与えます」と。ご自身に永遠のいのちがない人がこんなことが言えます？持っていないものを与えることはできません。イエス様ご自身のうちに永遠のいのちがあるからです。また、「彼らは決して滅びることがない」と言われます。この救いにあずかった者たちは決して滅びることがない。この救いを失うことがないし、永遠の地獄に行くことは絶対ないと。「また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」、つまり私が彼らをとらえているゆえにだれもわたしの手から彼らを奪っていくようなことはない。この神によって救われた私たちは永遠にこの神によって守られているのです。だれもあなたを神から奪い去っていくようなことはできない。救いというのは永遠のものです。イエス様が与えられたこの約束を見る時に、確かにイエス様のうちに永遠のいのちがある。だからイエス様はそれを与えると言われたし、イエス様よりも力ある存在はどこにもいないのです。だからイエス様がとらえてくださったら、だれもイエス様から私たちが奪い去ることはできない。こうしてみことばは私たちにイエス・キリストはまことの神だ、いのちの源であり、この方は神ゆえにこの方に勝る存在はどこにもいないことを明らかにしている。

#### (2)「ペテロと他の使徒たち」

もう一度「岩の上にわたしの教会を建てます」ということばに戻っていただきたいのですが、そういうことで、ある人々はこの16節にあるペテロの告白がこの「岩の上」の話ではないのかと言います。そうなのかもしれない。でも私が次の解釈を取るのには、どうもそちらの方がほかの聖書の箇所が教えていることと一致するように思えるからです。この「岩の上に」というのはペテロとほかの使徒たち、十二使徒たちの話です。ペトラというのは大きな岩でした。小さな石ころであるペテロではなくてもっと大きなものです。恐らくこれが言いたかったのは、ここでこのような告白をしたのはペテロひとりではなかったということです。例えばペテロがこの告白をした時にみんなが横にいて、「へえ、そんなふうに

あなたは信じているの？」というふうに思ったのではないということです。つまりペテロ以外の者たちもこれと同じ告白をしているのです。なぜだかわかりますか？救いというのは神のみわざだからです。なぜそう言い切れるかという、20節を見ると「そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言うてはならない」とあります。今真理を明らかにされたのですが、イエス様が弟子たちに言ったのは「だれにも言うな」でした。その後を見ると、「と弟子たちを戒められた。」と書いてあります。「弟子たち」と書いてあるでしょう？このように告白したのがペテロひとりだったとしたら、「弟子を戒めた」なのです。でもこのように告白した弟子たちが複数いたゆえに、イエス様は「言うてはいけない」とその弟子たちを戒めた。というのは、ペテロは使徒たちの中でも一番代表して話をした人物でした。この十二使徒たちの口であったのはペテロです。ですからペテロは確かにここでこのようにすばらしい告白をするのですが、イスカリオテのユダを除いたほかの弟子たちはみんな同じように告白した、イエス様のことを同じように信じていたのです。

ですから、イエス様という礎石があって、そして「この岩の上に」建てていくと言った時に、この「岩」、ペテロというのはその中の小さい石です。その石が集まった岩、まさにペテロとペテロとともにいた使徒たちが「岩」として、その上に教会を建て上げていった。実際にほかの聖書の箇所でも一致していると言いました。というのはエペソ2：20に「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。」と記されています。イエス様が礎石でその上に土台が建っていると。その土台は「使徒と預言者」と書いてあります。もう少し進んでエペソ4：11にも「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」と書いてあります。つまりこの箇所が何を教えているかというと、教会がどんなふうに誕生してきたのかという話です。教会は、この使徒たちによって建て上げられてきたのです。イエス・キリストという礎石を持った者たち、イエス・キリストの救いにあずかった者たち、この十二使徒たちが教会の土台を築いていくのです。

イエス様がこのお話しをした時に教会は存在していませんでした。では教会はいつ存在するようになったかという、イエス様が天に凱旋されてから10日後のペンテコステの時に興ったのです。それから教会が誕生するのです。その時にだれがメッセージをしたのかという、ペテロがメッセージをするのです。そして教会が建て上げられていくのですが、今お話ししたペンテコステの時に、ペテロが立ち上がりメッセージをします。使徒2：14「ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。」と、ペテロのメッセージがこの後ずっと記されています。37-38節「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか。』と言った。そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。』、そして40節「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、『この曲がった時代から救われなさい。』と言って彼らに勧めた。そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」と、この初代教会に起こった出来事、ペンテコステの時に起こったことが記されています。その後42節「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」とあります。初代教会がこうして誕生していくのです。その時に彼らが何をしたかというと、この使徒たちのメッセージ、教えにしっかりと立とうとしたのです。神様は初代教会において教会が建て上げられていくプロセスにおいて使徒たちをお使いになったのです。使徒たちを使い、そして預言者たちを、また伝道者たちを、そして今もその働きは継続しているのです。

今は、使徒は存在していません。今は牧師、教師たちを通してその働きをなしているのです。ですから牧師の一番大切な働きはみことばをもって人々を養うことなのです。これが神のメッセージです。このメッセージにしっかりと立っていきなさい。このメッセージを実践していきなさい。まさに初代教会でペテロが教えをなし、人々は「使徒たちの教えを堅く守」っていたと。お気づきになりました？イエス・キリストを信じた者たち、その礎石をしっかりと持った者たちがこうして神によって用いられて教会が誕生してきたのです。ですからこの初代教会を見る時に、目に見える教会として神が何を求めているのかおわかりになるでしょう？「使徒たちの教えを堅く守」ることなのです。その当時、まだ新約聖書は完成していなかったのです。だから神様は特別にこの使徒たちを用いて神のメッセージを人々に知らしめたのです。今私たちは完成された神のみことばを持っているのです。だから私たちはこの神のことばを語らなければいけない。これが神様のおことばなのです。権威ある神様のおことばなのです。ですからここには権威が存在しているのです。私たち人間にはその権威はないのです。だから私たちはこうして見える教会で集まる時に、この神のことばに従っていきましょう、これが神の教えなのです。これが神が我々に命じていることです。

公同の教会に属する者たちは、そうやって生きてきたのです。公同の教会に属する私たちはこうして

見える教会にも属しているのです。その見えない公同の教会に属する私たちに神が何を求めておられるのか知っています。この神のみこころに従っていくことです。そして今我々は見える教会にあっても同じことを言っているのです。兄弟姉妹の皆さんと神様のおことばに従う、それが私たちの神に対する責任です。こうして教会が建て上げられてきたのです。目に見ることのできない公同の教会であっても、見える教会であっても、教会である以上神は同じことを私たちに求めておられる。しっかりとそれを我々の心に刻むことです。クリスチャンであるならば、あなたの責任は罪から離れ続けることです。そしてこの神様のみことばに従い続けていくことです。神への忠誠心、それが神が私たちに求めておられることです。そして神にはその権利がおりなのです。この方によって造られ、この方によって救われたからです。

### 3) 教会への祝福 18節

最後に短くこの18節の中で「ハデスの門もそれには打ち勝てません。」と続きます。「ハデス」というのはヘブライ語の「シェオル」と同じ意味だと、「陰府にくだり」のところで学んできました。つまり地獄ではなく、死んだ人々が行くところです。ユダヤ人たちはこの「ハデスの門」ということばを聞くのと死を意味すると理解したのです。この「ハデスの門も……打ち勝つ」つことができないとイエス様が言われたのは、イエス様が十字架で亡くなった後、たとえこの死の中にイエス様をとどめておこうとしたとしても、それはかなわないということです。なぜかというと、イエス様はその死から敢然とよみがえって来るのだと、主ご自身のよみがえりを教えたのです。そして我々はイエス様は確実にその死からよみがえって来たことを知っています。ということはイエス様の復活は我々にも同じ希望をもたらしたのです。私たちもこの肉体が滅んで死を迎えるかもしれない。でもたとえこの「ハデスの門」が私たちをとらえておこう、死が私たちをそこにとどめようとしたとしても、我々はそこから出ていくのです。私たちはよみがえるのです。我々の主がそうであったように私たちもその死から敢然とよみがえると。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネ11:25)と、イエス様が言われたように、我々はこの約束をいただいたのです。こんなすばらしい祝福を私たちに下さった。

その祝福をしっかりと覚えて生きることです。地上に残されている間はわずかでしょう。だからこそ皆さん、一体何のために神が私を救ってくださったのか、どんな目的を持って私を救ってくれたのかを覚えることです。その目的に沿って歩んで行くことです。その生き方こそが救われたあなたが神の前にむだのない人生を生きる生き方です。我々は神のために生きるのです。ことばをもって、私たちの歩みをもって神様のすばらしさを明かすために生きているのです。どうかそのことをしっかりと心に刻んで、この一週間歩んでください。